対談：

満州の思い出

広田閑子　鹿沼市
御子貝方志　鹿沼市

●多くの日本人が満州に行った

御子貝（みこがい）　父親が満鉄（注）に勤めていて、私は当時の満洲、大連の薩摩町で生まれました（昭和13年）。大連という町はロシア人が立てたすごい建物がいっぱいあった。その後、父親の転勤でハルピンに行きました。父は満鉄の機関士だったので、満州にいるときは比較的裕福な暮らしをしていました。その頃、家族は両親と子ども男3人、私が長男です。

私の叔父さんが満州にいたんですよ。満州で学校の先生をしていました。日本にいるより待遇が良いので、満州に移ったんです。戦後その人はロシア兵に連れ去られて、寒さのせいで10日目くらいに死んだそうです。ずいぶん後になってからその連絡が来たそうです。

広田　私の父親の弟が満州で醤油を作って成功したんですって。でも子どもたちは一人を除いて全滅。たった一人女の子が帰ってきたんですが、満州はいいとこだよ、って言っていたのを憶えています。

御　昔は兄弟が多かったから、家族の3人くらい満州に行っていることもよくあった。叔父さんの一人は終戦前に帰ってきたが、満州はいい所だと言ってた。

広　軍属というのは待遇がよかったんです。元の亭主の兄さんと私の兄は軍属で満州に行っていましたが、それぞれ家族もつれていい暮らしをしてましたね。兵隊と同じ待遇でしたから、たしか酒保（しゅほ：日本軍の施設内に設けられていた売店）と言ったと思いますが、そこへ行くと、砂糖や果物など、一般には買えないものがいっぱいあってびっくりしました。

●凍てつく冬の寒さ

広　冬はオンドル（床暖房）でしたか？

御　オンドルだったです。

広　義兄のうちはペチカ（暖炉）を部屋と部屋の壁の間に置いていました。壁が暖房のようなものです。焚き通しなんですけど、いくら燃しても石炭はただなんですよ。庭に石炭がいつも山積みでした。ただ、日本式の家屋なので、焚いても焚いても寒かった。

御　お湯を沸かしたり、ご飯炊くのはペチカで薪を使った。浴衣1枚でいられたんです。

冬は、外でもたもたしてると鼻が凍っちゃうんだ。凍傷になるから恐ろしかった。

広　叔父さんの家のガラス戸は、内側に2㌢ぐらいの厚さに雪の塊がついて外が見えない。部屋が暖かいから、水滴が氷の壁になる。太陽は照っても寒くて、とにかく外に出られないんです。ゴミ捨てに外に出るとき、気を付けないと金属のドアノブに触ったりすると、手がくっついてしまって大変なことになる。

お風呂も大変でしたよ。体洗ってると、はじめは温かかったのに汲んだお湯が凍り始める。洗い場は寒い。部屋は浴衣でいられる暖かさなのに。

現地の人はほとんど風呂なんか入らないですよね。年に一度ぐらいだから、びっくりしました。

トイレも寒い。便などすぐ凍っちゃう。「忠霊塔」って呼んでいたんですけど、壊さないとだめです。

叔父さんの家はチチハルの山の奥だったから、寒い所だった。そこの義勇隊の訓練所では、大人が兵隊に駆り出されたので、中学生くらいの男の子たちが残ったのですが、官舎の先生たちのところに水を運んだり、薪を運んだり、かわいそうでした。マイナス30度くらいが一日中続きます。北海道なんかとは比べものにならない寒さです。私は11月末から春ごろまでお世話になりました。

誰もいなかったら危うく狼に食べられそうになったこともあります。じーっと40、50㍍先から

狙ってるのです。怖い経験でした。

御　ハルピンは私がいる間は雪はあまり降らなかった。ただただ寒いだけ。満鉄の寮は割合に広かったし、ペチカで石炭をぼんぼん燃して外には出ないでうちの中にいました。

●日ごろどんなものを食べていたか

広　さて、何食べていたんでしょう…開拓団の本部から与えられたのですが、どんなものだったか…思いだせません。

御　キジはいっぱいいた。使用人に言うとすぐに取ってきてくれた。すき焼きなんていうとキジだったね。ナマズもいくらでもいる。空揚げにして食べた。

広　あまり美味しいものはなかったようですが、餃子は美味しいと思いました。特に美味しいと思ったのは粟餅。それを車に積んで切ったまんま、売ってましたよ。もち米の中に粟を入れてついた餅。あんこやきな粉を付けて食べた。

御　私は、よく満人が売りに来た、串に刺した団子がうまかった。

●終戦、ロシア兵と八路軍の恐怖

御　近くに揚子江が流れているんですが、川の橋が、爆撃された。なんで爆撃されたのか、もう日本はだめかもしれないと大人たちが言っているのを聞きました。そして終戦を迎え、それを境に世の中が一変してしまった。小学校1年生でした。うちは現地の中国人を使用人として二人雇っていたけれど、急にいばりだしてね、来なくなっちゃった。

　そして北のほうの新疆（しんきょう）あたりからどんどん日本人が逃げてきて、学校がいっぱいになってしまった。しかし、学校に引き揚げてきた若い衆をロシア兵がみんな連れていってしまった。ある日突然いなくなったのには驚きました。連れ去られた人はシベリアに抑留されたんですね。

　日本との条約を破棄して、終戦前にロシアが満州にやってきたんだ。それからというもの、1か月くらいは全然外に出られなかったね。これは危ないというので防空壕を掘った。食べ物はないのでサトウダイコンを中国人から高いお金で買って、それを油で揚げてうちのなかに干しておいた。そうしているうちにだんだん状況が悪くなってきて外にも出られなくなった。

　ロシア兵だけでなく、蒋介石の国民党軍と共産党が小競り合いをしていたから、その国民党軍が共産党に押されてどんどん南に下がってくる。彼らは武装しているので、私たちは絶対に外に出なかったです。子どもながらに怖かった。ロシア兵は体格もでかく、銃は日本と違って銃身が短く、連発銃だった。日本より進んでいる武器でした。

広　でも、ロシアの兵隊は着ている服は貧しかったですよ。そして、なんでもほしがった。時計とか、バンドとか、皮靴でもなんでも、よこせ、よこせって取り上げられました。

御　学校では机替わりのみかん箱。その上には、何もない。日本が負けたとたん、中国人に机でもなんでもきれいに持っていかれてしまったから。何もないところへただ行った。

　学校で習ったことは「ネズミと太陽」という物語がありますよね、最後はネズミが一番偉いんだったかな？　それしか記憶にない。

●辛かった引き揚げ

御　引き揚げたのは終戦の翌年。母親は桐ダンスだの、着物だの結構なものを持っていたが、日本の着物なんて二束三文、金にならない。結局帰ってきたときは着の身着のままでした。

　いよいよ引き揚げということになって、まだ中国人が汽車の運転ができなかったので、親父が運転してわりにスムーズに進めた。しかし、八路軍と国民党軍が小競り合いをしていたので、線路など吹き飛ばされて1週間も2週間も止まって動けないことがあった。食べ物がなく、ひもじい思いをしました。あるときなど、雨の中をおふくろが弟をおんぶして、私が末の弟を負ぶって歩いた。

家族5人の前後にはぞろぞろ人がいた。ところが、ついてこられず、列から外れる人もいる。が、だれも振り向かない。自分が生きることにせいいっぱいだったから。だから、だんだん人の数が少なくなってきた。そしてやっとの思いで港について、家族は皆一緒に船に乗り、無事に舞鶴に着くことができた。

広　私は、葫蘆（ころ）島からでしたが、どこから船に乗ったんですか？

御　親父に聞いておけばよかったが、親父も私もそのときのことは、あまりしゃべらない。どこからだったか…

　汽車が来ると、乗れるとこまで乗って、後は歩く。港に着くまで1か月ぐらいかかったんじゃないかな。子供を中国人に預けたり、置いて来たりすることもなく帰ってこられた。

　ソ連に近い牡丹江あたり、あの辺の人たちは何も乗るものがないから、歩くしかなかった。

広　私が行ったのは牡丹江からチチハル、ボツリっていうところです。私もそこから、あっちこっち歩きました。

御　ソ連に近いとこですね。

広　そうです。帰るときは、やはり足止めされて。川もお金を払わなきゃ渡れないんですよ。満人がお金を出せと。

御　私がいちばんつらいのは、汽車に乗ってから船に乗ったときの記憶。ひどかったですよ。汽車に乗ってもいつの間にか後ろの人がいなくなっちゃう。だれも自分が必至でかまってやれない。汽車に乗るときだって、乗らなければおいて行かれちゃうんだから。

　船のいちばん下には兵隊が乗るんだが、兵隊が赤痢などになると、そういう人をいつまでも船に乗せておけないので、どんどん海に投げ捨てちゃうんだ。みんなが帰れないから。…それはひどかったねえ。

　帰るに帰れず、ずっと後になってから帰ってきた人もいっぱいましたね。何日も何日も歩き続け、途中で旦那さんが亡くなっちゃって、子供を現地の中国人に置いてきた人も知っています。やむにやまれぬ…そういう人が何人もいましたよ。どんなにか辛い気持ちだったことでしょう。

　子供には何の関係もないんだけど、苦労してやっと日本に帰ってきても、今度は「満人」っていじめられた。子供同士で、「お前、満人じゃないか」って。子供なので意味が分からず、うまく言い返せなかった。向こうで生まれたんだから満人だって。子供だけでなく大人からも言われた。思い出しても悔しいよね。社会的地位のある人なのに。

●思い出すのは悲しい

御　こういう話は、あんまりしない。親父も話さなかった。なんだか悲しくなっちゃって…思い出すと悲しくなっちゃう。

広　遠い昔ですね。現代の何不足ない時代とはかけ離れた時代。自分でもよく帰ってきたと思いますよね。伯父さんがいたからだと思う。そうでなかったら、もっと苦労したかもしれない。

御　まあ、戦争はしてほしくない。

広　本当にそうですよね。平和の尊さをしみじみ感じ、感謝の日々を過ごさせてもらっています。

注：満鉄（南満州鉄道株式会社）
かつて満州国に存在した日本の特殊会社。一九〇六年（明治39年）から一九四五年（昭和20年）まで存在した。鉄道事業を中心として広範囲にわたる事業を展開し、日本軍による満洲経営の中核となった。（ウィキペディアより）